福島の児童文学者 9

羽曽部　忠

平成五年三月六日、会津を愛しつづけた詩人　羽曽部　忠（はそべ　ただし）が、食道癌で亡くなった。享年六十八歳であった。

羽曽部　忠は、古里（会津）の自然と人々の生活を織り込んだ、児童向けの詩・童謡・童話の創作を続け、昭和四十四年には『ぜいたくな空』で第四回福島県自由詩人賞を、平成元年には『詩集　けやきの空』で第七回新美南吉文学賞を受賞した。「おむすびころりん」・「ばら」など作品六編が、小学校の国語教科書に掲載された。

また、何度も個展を開いた画家でもあった。

羽曽部　忠、大正十三年五月二十日会津本郷町に生まれた。本郷尋常高小・旧会津中（現会津高）を卒業、後に福島師範に入学し、昭和二十年九月に卒業。その後、郷里の若松一中などで六年間教師生活を送るが、詩への熱い思いを如何ともし難く、昭和二十六年上京し、教師の傍ら、『こどもと文学』・『らてれ』・『ぺんぎん』・『ぎんやんま』等に詩や童謡を発表、ほかに児童詩の指導研究も行っていた。

〔忠　と　詩〕

これほどまでに熱き思いを傾けた詩との出会いは、中学時代に北原白秋を知ったことによる。その後は、与田準一、まど・みちお両氏の影響を受けることとなる。

忠にとっての詩とは、「暮らしの哲学のつぶやきであり、ふるさとへの熱いメッセージであった。」と、蛯原由起夫氏は言っている。又、田中冬二氏は忠の詩を評して、「全然技巧を用いず、粉飾もなく、素朴一点ばりの素直さ大らかさ。農民の持つヒューマンな美しさ。大地に根を張った生命力の強さを歌い出している。」と、賞賛している。

彼が熱いメッセージを送りつづけていた古里・会津とは、忠にとってどのような所だったのだろうか。

〔忠と古里・会津〕

忠は、福島師範に入学する昭和十八年まで、会津を離れたことは無った。昭和十年代の本郷町は、登り窯が九十基近く並び、煙で町の空をこがしていた。白鳳山の頂上からは、磐梯山や飯豊山などが一望でき、子供たちの絶好の遊び場であった。阿賀川上流の大川も水浴びや魚取りの絶好の場であった。忠にとって本郷での日々は、いたずらだらけの日々だったようだ。当時、一日六本しか走っていなかった只見線の大川鉄橋を歩いて渡り、保安係の人に怒られたとも、書いている。

そんな古里・会津を離れる時、福島に向う汽車の窓から会津盆地が見えなくなるにつれて悲しくなり、隣の人に気付かれないように泣いていたと、後に語ったことがある。

数年前、在京本郷会から頼まれて作った会歌は、

遠く離れて朝夕に／思い出すのは思うのは／白鳳の山　阿賀野川／駆けて回った日のことが／次々とわくわいて出る／会津本郷　会津本郷／我がふるさと

なんともメロメロな望郷歌であると、忠自身が書いていた。

彼のその後の作品も、会津という郷土をバックに、その精神の志すところは少しも変わることは無ったようで、「土の香のする郷愁の詩人」と評されていた。

手遅れの癌であり、「長くは生きられない」と医師に告げられた時、自選詩集の出版を早めてもらい、病床で詩集の出来を喜び、そして寄贈した方からの手紙を楽しみにしていたと、奥様が語っていた。忠の最後の作品となった、『世界で一番、夕焼けが美しい町のできごと』の中に、

インキ花

ダザイ・オサムが
こよなく愛したムラサキツユ草を
会津ではインキ花と呼びました。
花の色の赤紫と
インキの茄子紺が
同じなかまに入るからでしょうか。
ほんの少し心して見れば
色の違いがずいぶんとあるのですが
それにしてもインキ花とは
なんともハイカラな。
今や、
ボールペン、サインペン、フデペン
と、カラフルにあふれている時代
いずれインキがなくなれば
ダザイの生命のように
花の名も
消えてしまうのでしょうが
せめて
―磐梯山にはインキ花がよく似合う
と、ダザイの名言にあやかって
残して置きたい俗名である。

のように、最後の最後まで、古里を書き続け、「詩仙院忠岳盛成居士」と名を変え、この世から消えてしまった。

せめて
――会津には羽曽部　忠がよく似合うと、残して置きたい詩人であった。